

自治随想

じちずいそう

Vol. 108

文教住宅都市宣言の西宮市

徳島文理大学総合政策学部(兼総合政策学研究科)教授
徳島県及び高知県参議院合同選挙区選挙管理委員会委員長



西川 政善

2016年9月10～11日、関西学院大学において日本計画行政学会第39回全国大会があった。都市の個性・特徴づくりを宣言し、そのテーマに沿ってまちづくりを官民挙げて推進することの意義を感得する機会となった。

その経緯

西宮市は54年前、当時日本で大きな議論となっていた重工業化の路線を選択するか、そうでない方向を目指すのかの岐路に立っていた。当時の現職市長は工業化推進派、対してその路線に危惧を持つ人々が対抗馬に辰馬龍雄氏(辰馬本家酒造当主)を担ぎ当選を果たす。西宮市は宮水による酒造りの発祥の地、辰馬氏は重工業が環境汚染をもたらすことに大きな懸念を抱いていたので、新市長就任後直ちに西宮市の歩むべき道として、文教住宅都市宣言を制定したのである。その後、今村岳司現市長に至るまで、この宣言に基づき市政を遂行している。私も現職市長時代に競輪開催市として西宮競輪と交流が深く、当時の馬場順三市長と度々会う機会があり、まちづくりに

ついて意見交換を重ねた。折々に馬場市長の文教住宅都市推進の熱い想いと実践を開くことができた。辛い思い出であるが、阪神淡路大震災の時には水等救援物資を送り届けた記憶もある。阪神間に隣接して位置する西宮市と尼崎市とは異なるテーマ、文教住宅都市と重工業都市を掲げそれぞれの道を歩む。人口約49万人、大学数8校、学生数約3・5万人、私立中・高校も多く、住宅も阪神間の良好な住宅地として認知されている。一方、重工業都市化路線を選んだ尼崎市は、環境・公害問題をクリアしながら陸・海上交通アクセスを活用して、人口約49万人、臨海部の鉄鋼・化学等基礎素材型産業、内陸部の一般機械・精密機械等多様な業種が集積し、工業都市として発展してきた。今後は、既存工業の高度化や産業構造の都市化、新たな企業の立地促進、商業の活性化を進めることが、尼崎産業の重要な課題とされている。

文教住宅都市宣言の契機

その原動力は酒造り産業

と言えそうだ。酒造りは西宮市の文化のひとつであり、まちづくりの大きな柱のひとつと言えよう。長部訓子大関酒造(株)専務取締役の話でも、1711年以来305年以上続いてきた今津浜一帯の酒造蔵は、米・砂糖・水・人・六甲おろしの風・吉野杉・港など恵まれた条件の下で隆盛を極めた。こうして海岸近くに湧く六甲山の伏流水「宮水」を使った「灘五郷」は神戸市にまたがる酒造街となり、屈指の清酒生産量を誇るようになる。しかし1945年8月5日の大空襲で酒蔵ひとつだけ残して壊滅状態、その状況はアニメ映画「ほたるの墓」で映像化されている。懸命の努力で酒造産業は復興し、関係者は商売もするが遊び(三味線・茶・芸ごとなど)にも熱心で六角形のダンスホールをつくるなど文化交流にも勤しむ。さらに学校・保育所等を造り子育てしやすいまちを目指すようになったと言っているのである。暮し文化の先駆けの役割を果たしたのだ。また、えびす神の総本社「広田神社(2005年)」は、西にある宮だけに西宮神社、「えびすさん」として親しまれ

市政の方針

「十日戎」が多く、参詣客を集め、西宮市の名の由来もここにあり、夙川沿いのサクラ並木とともににぎわっている。

就任3年目の今村市長は「3千人の職員(社員)がいるトップ(社長)として関西学院大はじめ各方面の方々と語り合う市政」を心掛けたいと語った。また特に興味を引いたのは、「自分が京都の学生時代には純京都人みたいに京都を語り食し生活を楽しんだ。こうした関心を西宮に住む市民に持つてもらえるようにしたい」という。折角、西宮の地を3万人を超える学生が選り、学び、遊び、住むのだから、誇りを持って住み続けてもらえらるよう、また第2、第3の故郷として帰ってきてもらえるように市が声をかけアプローチしていきたいと強調された。自らが京都で体験した言動を少子高齢化の時代に西宮に住む学生が身につけ、一旦離れていてもUターンして帰ってきてもらえる市政を目標にしているという。さらに「豊かさとは何だろうか」をテーマに、現在、

コンセプトを策定中であり、「住み易い、選択肢の多いまち」を目指したいと語った。この考えの背景には、関東大震災で東京から谷崎潤一郎ら多数の文化人が西宮に移り住み、文化的な素地を作った歴史がある。持ち味を活かした個性を伸ばす振興プロジェクトを視野に置いているのだ。

地場のものを世界に売る

関西学院大学国際学部の本木圭一教授からゼミ学生と共に、関学日本酒振興プロジェクトを立ち上げ、大学と地域・企業そして行政との連携を具体的に推進する事例の発表があった。3年目を迎えたゼミ活動3回生の代表は、若者世代の日本酒需要の低下現象の下で、ライム・ミント・ジンジャーエールなどと4社の日本酒をカクテルにして市内飲食店で販売委託、さらには外国に向けてブースを出店し、海外展開を図る。すでに台北、シンガポールなどで実証しているという。意見発表をした3回生の学生は「自分はいいのだが、1〜2回生の未成年者は酒が飲めないのに、おいしいで

すよとは言えないなあ」などとさわやかなジョークを飛ばしていた。懇親会において私も日本酒カクテルを賞味させてもらったが、工夫された味はなかなかのものであった。翌日のエクスカーションでも、宮水による酒造り発祥の地を散策しながら実際に酒造りの街づくりを視察・体験し大いに参考となった。

学校のような場所

背後に緑の甲山を背負い、正門前に立つと広々と緑の芝生絨毯、ペーージュ色に統一されたチャペルや各学部校舎などは1部5階、ほとんどは3階程度に制限されて整然と建つ。高木の並木を両サイドに配した学院内連絡路も趣き深い。そんな関西学院大学で聴く文教住宅都市宣言西宮ストーリーは、いかにも心地よく新鮮な想いがした。そこに集まる3万余の学生に第2、第3の故郷と想ってもらえる全国から終のすみかと思ってもらえ



甲山を背景に関西学院大学と想ってもらえる全国から終のすみかと思ってもらえ

る住宅都市建設を宣言し、営々と励むというのである。話を聞きながら、ふと私の脳裏に浮かんだデータがある。15〜39歳の「生活に関する調査(内閣府)」にいれば、学校や仕事に行かず半年以上も自宅に閉じこもっている「引きこもり」の人数が約55万人いる。さらに40歳以上の引きこもりの実態は、もっと深刻な家庭問題、社会現象化している。という別のデータもある。こうした人のいる家の生活は当事者の父や母が支えているのがほとんどであって、支える側もいざれ高齢者になると思えば背筋が寒くなる。引きこもりのきつかけは、不登校・うまくいかない就職活動、職場になじめないなどであるようだ。しかしこうした経験は誰もが人たちが立ち直ってきた。「よくあること」であろう。そんなキッカケで7年以上も引きこもってしまった人々が相当数いるとは、一体どういうことなのかと思ってしまう。こんな時に相談をかける人やグループ、NPOや行政などのシステムが必要なのではないかと思われる。ある女性は「学校の

ような場所があったらいいのに」と言う。これは大切なことで、「ここは学校のような場所」「いろんなことでも大事なことを教えてくれる場所」「いつでも帰ってこれる場所」などが、日常生活の身近にあればどんなに心強いことだろうか。家庭や居住社会のコミュニティが求められていることは確かであろう。複雑多様化し続ける現在社会にあつて、誰もが陥る可能性があるブラックボックスに対応できる「自助・共助・公助」のシステムづくりが急がれる。「そんなこと言っちゃって」と、二の足を踏みそうだが、そんないとまはない気がしてならない。

ひとつの提言

半世紀前から継続する西宮市の文教住宅宣言都市の精神は、学校を中心とした教育対応力の工夫、企業や地域社会における教育力の醸成なのでないかと思われる。そんな想いで周辺を見渡せば、心を癒し相談のできる場、「学校のような場所」になり得るところはいくらでもあることに気付く。小・中・高校・大学の同窓

会、そこには恩師・同窓生・クラブ・セミナーなど共に研鑽した仲間たちが集う機会がある。地域においても趣味のグループ、町内会、婦人活動、青年活動、児童活動など、ひと工夫すれば縦横につながり断続性を持つ存在にもなる。企業活動の中でも社員教育の流れの中に、同期・同業種仲間の横のつながりを活かすことだってできる。そのいづれもが懐かしさや実益追求に止まらず、現在の悩みや望みを語り合い、アドバイスし合い、助け合うことだってできるに違いない。ここに「公助」、行政の適切な支えが提供されればより強い絆が生まれてくる、というのが西宮宣言の根底にあると思われる。意義深くシンポジウムを拝聴した私は、その西宮宣言を称えると共に、是非とも「学校のような場所」をキメ細かく市民生活の中に醸成されることを提言した。今村市長からの「住み易い・選択肢の多い市民・企業活動を推進するために行政の役割をしっかりと位置付けたい」とのコメントに意気投合した2人の対話はその後大いに弾んだ。